地方の、これといった特徴の無い町に出かけた。しかしそれは外から見て得られる情報のみを根拠にした場合のその町の印象であることは、三日目の滞在にしてはっきりと分かった。

人口はそれなりにあり、飲食店が多く、おいしい居酒屋もイタリアンも中華屋も喫茶店もあり、また海も野もある、素敵な町だ。無いのは背の高い建物と風俗店とぼったくり店だけなような気がしなくもない。ともすればここは素敵な町だった。

若かりし頃に父が住んでいた町らしい。母とは違い、大金を手にしても振り回されることのないまま死んだ父の根底は、おそらくここでつくられたのだろう、と勝手に思う。

ラーメンと餃子とビールで膨れた腹をさすりながら海風が吹いてくる方へと歩く。細い道は選ぶ道が正しいかどうかを不安にさせてくるが、立ち止まることももと来た道を戻ることもせずにそのままひた歩む。

道の両端を流れる下水の水はそこを流れるにはあまりにも綺麗で、苔による彩りもまた目を惹いた。敷地を分けるブロック塀の上に猫が座っている。にゃあ、という鳴き声はあいさつのように聞こえ、「こんにちは」と返すとその猫は驚いたような表情を見せた。

つい立ち止まると、彼もしくは彼女はぴょんと塀から飛び降りて足元にすり寄ってきた。一瞬見えた睾丸が猫の性別を断定した。彼はにゃあにゃあと言い始めた。抱き上げてほしそうな顔を見せてきたので、俺はためらいがちに抱き上げた。彼はまったく抵抗をみせなかった。むしろこちらに身体をあずけてきた。俺はあまり猫が好きではないが、そこまでされてしまうと無理に下ろそうとも思わなかった。抱いたまま、また進む。

段々と潮の香りが濃くなってくる。濃くなるほどに、期待もまた増してくる。もう二十半ばを越しているというのに海に心を躍らせるというのはいかがなものかと思わなくもないが、これはまさしく海無し県に生まれ育った宿命なのだと感じる。猫を抱えていなければ、今すぐにでも通りを駆けて行きたい衝動が鼓動している。猫を見る。猫も見る。目を細めてきた。気付けば顔をその体毛にうずめていた。

猫を抱いたまま、やっと海を拝めた。空は青く雲は白く、海は蒼く浜は白く、ほう、と自然と息を吐いた。俺は遠浅の海の綺麗さに感嘆していた。左右を見る。右の方はすこし先の方に消波ブロックがあるのが見えたが、左の方はずっと先の方まで砂浜が続いていた。その左の先の方に、ひとが一人だけ立っているのが見えた。

その他にはだれもいない。

俺が予感すると同時に、俺の腕の中で穏やかにしていた小太郎が急に動き出した。身をよじらせ、腕から脱して砂浜に足跡を刻んでいく。猫科特有の低姿勢で、駆けて行く。やがて立ち止まった小太郎は独り立つ女性の元に立ち止まり、何かを言って抱えあげられていた。女性は小太郎の顔をじっと見つめた後、こちらに顔を向けてきた。

私も予感とも期待とも言えるものを胸にそちらへ歩き出す。

× × ×

一週間前に父が死んだ。心臓突然死だった。

子は親より先に死んではいけない。娯楽目的に麻薬を使ったやつは人間の屑。強く優しく。

その三つが父の主な教えだった。そのおかげで悲しみはしたものの、日常に支障をきたすようなことはなかった。強かに日々を過ごす自身を客観的に捉え、父の偉大さを改めて知った。

父の遺品の整理は主に俺の役割になった。兄は申しわけないと言っていたが、家族がある以上、子どもや奥さん以上に優先すべきことはないので、いつか酒に付き合うことを約束してくれればいい、と言った。兄はそれでも申し訳なさそうにしていたが。

誰も住まなくなった家はあっという間にダメになっていく、とどこかで聞いたことがあったが、それはどうやら真実らしかった。父の葬式が執り行われた週の末から毎週末トラックで生家に出かけたが、そのたびに家そのものから元気が薄れていくのを感じた。

父は律儀で綺麗好きだった。学生の頃のアルバムはもちろんのこと、これまでに書いてきた日記をすべて袋に入れた状態で残していた。片付け初日にそれらを見つけ、十八から二十までの日々を書いた日記を読みふけって一日を無駄にしてしまった俺は、それらを先にトラックの荷台に乗せた。大量の荷物の整理を一ヶ月足らずで終えられたのは、生前の父が死後の苦労を見越して断捨離や整理を先にある程度やってくれてたらしいのもそうだが、日記やアルバムを早く見たさがあってのことでもあった。

日記には苦労が多く書かれていたが、父はそれらを悲観的に捉えていなかったようだった。よく笑い、よく泣いた。父から子への想いの丈は何度か聞かされたことがあったが、もう二度と肉声で聞けないことを、今後何度も見ることのできる日記の中で改めてその思いの丈を知ることで理解させられ、目をひどく腫らせた。

数多くの日記とアルバムの中に、不自然な二冊があった。日記に一冊とアルバムに一冊で、二冊だ。その二冊は父が二十三から二十七歳だった頃を知るための二冊だった。それらは水に濡れたようで、しわしわになっていた。写真も、昏い印象を受けるものが多く、『何か』があったらしいと確信させられる決定的なものがあったりもした。日記の内容は主に情事だった。

父は二十三から二十七歳までの間、地方の田舎町に住んでいたらしい。そこは特に知名度のある町ではなかったが、良い飲食店が多く、自然もまた豊かな海辺の町だった。父はそこで多くのことを学んだらしく、その町を第二の故郷だと考えていたようだった。しかし、その町で遭ってしまったひとりの女性に対して複雑な想いを抱くに至ったらしい。

詳細は書かれていなかった。想像で補うほかなかった。

文章の中に、俺を一週間の旅行にかき立てさせたこんな一文があった。

――彼女は、おそらくは、老いない。

× × ×

まるで本の世界から出てきたかのようだ、と思った。純白のワンピースをまとった細身の美人が麦わら帽子をかぶっていればだれだってそう思うだろう。

日記に具体的な外見的特徴は書かれていなかったし、見た目から想像できる年齢が俺とあまり変わらないにもかかわらず、なぜかこの女性は父がかつてかかわった女性の血縁者だろうとほとんど確信しながら、動揺はおくびにも出さずに挨拶する。

「こんにちは、良い町ですね」

「――そうですよ。良い町です。ここは」

独特でマイペースな人物であることを悟る。

「俺、旅行で来たんです」

「……お父さんのように？」

「……え？」

告げられた一言に頭が固まる。思考もぴたりと止まる。

「亡くなられてしまったんですね。残念です。でも、息子であるあなたがここに来てくれて、私は嬉しいですよ。――でも、また会いたかった」

その言い方は、あり得ないものだった。

「……なにも聞いてないの？」

「日記で、この町とここでの出来事を少し知っただけです……」

「……そっかあ、そうだよね」

女性は麦藁帽に目元を隠しながら俺にではない誰かに言う。寂しげで自嘲的だった。

しかして次いだ一言は、

「じゃあ、いっかあ」

無邪気とは言いたくないものだった。

「キミはさ、お父さんが何に遭ったか知ってるの？」

「老いないバケモノで」

女性の目がすっと細められる。それが何の前兆か、男は予感するばかりでわからない。

「魅力的過ぎる女性に会ったというのは知っています」

俺が彼女の細まった目をじっと見つめて言うと、女性の中で今すぐにでも破裂しようとしていた何かが、急激に萎んでいったのを感じた。それが事実なのかただの予感なのかはわからなかったが、ほそめられた目は明らかな悲しみを帯びた。

「そっか。いい話だね。じゃあ、町を楽しんで」

女性は頷きながら言い、そして返答も反応も待たずに背を向けた。

最後に、女性の腕に抱えられたままの猫がこちらを向いて「にゃあ」と鳴いた。